〈研究ノート〉

研究動向
―― オーラルヒストリー研究の歩みと現在 ――

朴　　沙　羅

1　背景と目的

近年、オーラルヒストリー研究は社会科学における重要性を高めつつある。歴史学、特に現代史において口述資料を引用することは珍しくない（ハース 2008=2012）。政治学あるいは政治史・政策史研究の一環として、官僚や政治家にインタビューを行うことも、現在ではひとつの手法として確立しつつある（御厨 2009）。

社会学においても、オーラルヒストリーは手法、あるいは学問分野として重要視されつつある。2007 年、関西社会学会大会においてシンポジウム「オーラル･ヒストリーと歴史」が開催された。その際に報告された論考は、2008 年に『フォーラム現代社会学』誌上でシンポジウムと同名の特集に収録されている。特集の冒頭で、蘭由岐子は「歴史学の「分家」である社会学にとって、歴史とどのように向き合うかはつねに難問である」と述べ「社会学、とりわけ歴史社会学では歴史をどのように位置付けているかに関して歴史学からつねに厳しいまなざしが投げかけられているうえに、ライフストーリーという個別性を刻印された人々の語りからいかに歴史の全体性にせまるのか、という課題を解かなくてはいけない」（蘭 2008: 84）と問題を提起した。蘭の指摘に従うなら、オーラルヒストリー研究は、過去の経験に関する個人のインタビューデータを、どのように「歴史の全体性」の中に位置づけるかという点で、生活史研究と重なる問題を持っているということになる。そして生活史研究のみならず、過去の出来事やその経験を扱う社会調査全体にとって、オーラルヒストリー研究を参照することに意義があることを意味する。

他方、オーラルヒストリーが知名度を広めるにしたがって、その方法のとらえ難さと定義の難しさにも焦点があてられている。清水透は以下のように述べ、オーラルヒストリー研究の方法が模索中であること、そして「オーラル・ヒストリーとは何なのか」について

の共通理解がないことを指摘している。

> 我が国でオーラル・ヒストリー学会が創設されたのはつい先年 [2006 年] のことであり、「聞き取り」にかかわる専門分野相互の交流も始まったばかりである。それだけに、個々の研究者はつねに方法の模索を迫られ、聞き取りの成果をどのような形で記述に取り込むかについても、多くの迷いを経験してきたのが実態だと言える。また、オーラル・ヒストリーとは何なのか、といったその定義についても、少なくとも我が国では共通理解が成立しているとは言えない。（清水 2007: 31）

このような困難は、「我が国」、すなわち日本国内に限らない。世界に目を転じても、オーラルヒストリー研究は、歴史学との対話あるいは論争の中で、自らの依拠するべき方法論を議論してきた。その議論の展開はたびたび著書や論文としてまとめられ、数年おきにレビューすることができる（Thompson, A. 2006; Wengraf 2002; Frisch 2006）。それらによれば、オーラルヒストリー研究は基本的に、文献史学に範をとった歴史実証主義的な方法（Thompson, P. 2000）から、次第にデータの主観性や個別性を生かすにはどうすればいいかを検討したり、調査者・被調査者の関係を重視したりする方向へ転換した（Yow 1997）。その後は調査方法やデータ収集技術の変化に伴い、アーカイヴ化への関心が高まっている（Frisch 2006）とまとめることができる[1]。また、各国のオーラルヒストリー研究の概要を紹介する論文もしばしば刊行されており、リーディングスや教科書としてもまとめられている。

しかし、オーラルヒストリーの方法論だけを取り上げて議論するのは、個々の方法論が主張されたときの学問的背景や、その主張を生み出した歴史的・政治的背景を見落として

---

[1] このほかにオーラルヒストリー研究の方法論をまとめたものとして、マイケル・フリッシュやロバート・パークスとアリステア・トンプソンの論考がある（Frisch 1993; Perks and Thompson 2009）。前者はオーラルヒストリーの歴史を 3 つの段階に整理し、それぞれを「もっと歴史を more history」、「反 - 歴史 Anti-history」、「如何にして歴史は成るか how-history」と名付けた。最初の段階、即ち more-history の段階では、「以前はアクセスできなかった、過去についての新しい資料」を提示することがオーラルヒストリー研究の目的だった。次に、既存の歴史学に対抗するという意味での anti-history の時期においては、「過去の出来事がどのようなものだったかを、伝統的な歴史記述を越えて、より直接的に記述する」ことが目指された。最後の how-history では、調査者が歴史研究者であることのプロセスを理解し、あるいは自らの立場性に対する疑問を投げかける行為がオーラルヒストリー研究の中で一定の役割を示していると論じられている。後者は「オーラルヒストリーの理論と実践」の歴史を 4 つのパラダイムに区分した。1 つめは「人々の歴史」の資料として記憶が重視されるようになった時期を指す。2 つめは 1970 年代後半から始まる「ポスト実証主義」の時期で、記憶と主観性が重視された。3 番目のパラダイムは 1980 年代後半に始まり、調査者としてのオーラルヒストリー研究者の役割が注目されるようになった。1990 年代後半以後は口述資料のデジタル化という局面を迎えている。いずれにしても、実証主義から「主観」と調査者 - 被調査者の関係へと、方法論上の中心となる議論が変化したことは共通して指摘している。

しまう危険性がある。またオーラルヒストリーが何を対象としどのような目的で行われてきたのかという事柄は、さまざまなレビューにもかかわらず、特に日本においては未だ明らかにされていない。

清水の指摘する通り、オーラルヒストリーとは何かを論じ、定義するのは難しい。もちろん、オーラルヒストリーを用いたあらゆる研究をレビューするのは不可能だ。しかし、被引用数の多い論文や、これまで行われてきたオーラルヒストリーのプロジェクト、あるいは学会の成立過程などから、オーラルヒストリーは何を対象としてきたのかを明らかにすることは可能である。過去50年間にわたって、世界各地で行われたオーラルヒストリー研究を概観することで、オーラルヒストリー研究が誰によって、どこで、どのようになされてきたかの概略を知ることができる。そのような事実関係を整理することは、オーラルヒストリー研究が成立するにはどのような条件が必要だったかも同時に明らかにするだろう。

オーラルヒストリーとは何かという問題は、主観対客観（中村 1989）、あるいは文献資料対口述資料（桜井 2008）、聞くことと書くこと（小林 2010）といった対立軸の中で検討されてきた。また、「視点を広げれば、さまざまな水脈を掘り当てることが出来る」（江口 2013: 137）と論じられているように、「オーラル」であることを特に強調せずとも、口述資料に依拠して著された論考は数多くある。広川（1994）の指摘する通り、日本現代史では「聞き書き」「聞き取り」としてインタビューが行われる場合も少なくない。しかし、本稿では「オーラルヒストリー」という語でどのような研究が参照されているのかを考察し、それによって「オーラルヒストリー研究」がどのようなものであろうとしてきたのかという問題に答えたい。すなわち、本稿の目的はオーラルヒストリー研究がいかなる目的のもと、何を対象とし、どのような調査を行ってきたのかを明らかにすることである。

以下、このような関心に基づいて、過去50年間に行われたオーラルヒストリー研究の概要をまとめる。まず地域ごとにオーラルヒストリー研究の歩みを整理し、次いでそれらの研究をいくつかに分類する。なお本稿では、非英語圏、特にアジア・アフリカ地域に関して入手できる論文数が少ないこと、そして何よりも筆者の能力のために、情報量が非常に偏っている。この問題点の克服は今後の課題としていきたい。また日本におけるオーラルヒストリー研究の歩みに関しては稿を改めて論じる。

2 オーラルヒストリー研究の成立と展開

2-1 イギリスと他のヨーロッパ諸国

英国のオーラルヒストリー研究者として著名なポール・トンプソンは、オーラルヒストリー研究が最も早く始まり、充実しているのは北欧諸国とイギリスであると述べている（Thompson, P. 2000=2002: 121）。確かに、スウェーデン・フィンランド・デンマークでは19C後半から組織的な民話の収集が進み、1830年代にはスウェーデン・フィンランドの各地に民話資料館が設立された。1870年にはスウェーデン方言協会が設立され、1914年にはスウェーデンで「方言と民話研究所」が発足した。労働党に所属する政治家でもあり、歴史学者でもあったエドワード・ブルは、『ノルウェー個人誌目録（Norsk biografisk leksikon）』（Bull ed. 1923）の編集を指導した。民俗学と社会史にまたがったオーラルヒストリー研究は、北欧の社会科学で民俗学が中心的な地位を占めていたことと関連している（トンプソン 2000=2002: 122）。のちにブルを中心として都市労働者の調査が行われ、リンドクヴィスト（Lyndqvist 1978）は工場労働者の歴史を著した。

これに対して、オーラルヒストリー研究がひとつのジャンルとして成立したのは、第二次大戦後のイギリスである。ポール・トンプソン（Thompson, P. 2000=2002: 122-3）によれば、エディンバラ大学で組織的なオーラルヒストリーの収集が始まったのは1951年であり、この時には北欧のオーラルヒストリー研究に似た民俗学的関心が調査を進展する原動力となった。1960年代に創立されたエセックス大学、ランカスター大学といった新しい大学の社会学部はオーラルヒストリー研究の中心地となった。オーラルヒストリー協会（Oral History Society）が設立されたのは1973年のことである。

イタリアのオーラルヒストリー研究は、オーラルヒストリーの方法に新しい局面をもたらしたとしてしばしば引用されている（Frisch 1993; Grele 2006）。そのイタリアのオーラルヒストリーは、南北の経済格差を背景として発展した民俗学と、1920年代から盛んだった労働運動、さらには第二次大戦時のレジスタンス運動といった要素が結びついて発展してきた（Portelli 1991: 68-72）。アレッサンドロ・ポルテッリやルイーザ・パッセリーニ、チェーザレ・ベルマーニといった研究者は、労働運動（Portelli 1991）やファシズム時代の日常生活（Passerini 1987; Bermani 1997）あるいはレジスタンス運動や虐殺（Portelli 2004）を対象としている。またデ・マルティーノ協会（Istituto de Martino）やジャンニ・ボジオ・クラブ（Cicrolo Giannni Bosio）といった民間の研究所が民俗学的・人類学的興味に基づいて、音楽や雑誌などと共にオーラルヒストリーを収集している。にもかかわらず、オーラルヒストリー研究者として大学に籍を置いている教員がほぼいないことは、イ

タリアにおけるオーラルヒストリー研究のひとつのパラドクスだと言われている（Portelli 1996）。

文献資料を中心とした政治史が中心だとされてきたドイツでは、オーラルヒストリー研究というと、第二次大戦時の戦争被害の証言の収集やナチス政権下の抵抗運動と亡命者の記録、労働運動の歴史といった主題を扱う研究が挙げられる。例えば第二次大戦時のソ連軍占領地域からの避難経験は、1950年代に既に現代史研究所（Institut fur Zeitgeschichte）が12,000件以上の証言を収集していた。1970年代、米国から西ドイツにオーラルヒストリー研究なる概念が導入されると、1980年代から研究プロジェクトが始まった。例えば1980年にはエッセン州・ハーゲン州で「ルール地域の生活史と社会文化：1930年代から60年代」というオーラルヒストリー事業が行われ、労働者・経営者・ミドルクラスに属する400人以上の個人史が聞きとられた。同じくルール地域のハッティンゲンでは、1985年から87年にかけて「下からの歴史（Geschichte von unten）」プロジェクトが行われ、労働組合の歴史とナチスへの抵抗運動が記録された。またユダヤ人亡命知識人への調査も同じ時期に行われている（Hunke 1989）。

東欧諸国では、オーラルヒストリーの中心的なテーマとして第二次世界大戦が選ばれることが多かった。例えばポーランドの「歴史と出会う家（Dom Spotkań z Historią）」では、1987年にオーラルヒストリーアーカイヴが設立されて以来、現在までにおよそ3,000人分のインタビュー音声と動画が保存されている。ここでは戦間期から第二次大戦期、ナチズム、スターリニズム、ポーランド人民共和国時代を生きた人々の証言が保存されている。プラハのオーラルヒストリー研究所で所長を務めるミロスラフ・ヴァネクは、中欧・東欧におけるオーラルヒストリー研究の中心課題は第二次世界大戦であると述べている（Vanêk 2008）。しかし、冷戦終了後はポーランドとチェコを中心として、冷戦期および冷戦終了期に関するオーラルヒストリー研究が行われた。例えばチェコでは冷戦終了期に大学生だった人々から体験を聞きとった研究（Vanêk and Otáhal 1999）が1999年に刊行され、2005年には、フサークによる「正常化体制」期の政治家から個人誌を聞きとった研究（Vanêk and Urbášek eds. 2005）が刊行された。チェコのオーラルヒストリー学会が結成されたのは2000年であり、2014年にはポーランドで国際学会「Collective vs Collected Memories. 1989–91 from an Oral History Perspective」が開催される。

2-2　アメリカ合衆国

合衆国は英国と並ぶオーラルヒストリー研究の中心地だとされている。しかし、その源流はイギリスのものとは異なる。合衆国におけるオーラルヒストリーとしてまず言及され

るのは、ニューディール政策の一環として1935年に始められた「連邦ライター事業（Federal Writers' Project）」である。これは州ごとの観光図書（アメリカン・ガイド・シリーズ *American Guide Series*）を作成する目的で、歴史研究者・教員・ライター・図書館員などホワイトカラー労働者を約6,000人雇用した公共事業である。最終的に出版された観光ガイドでは、州の気候・自然環境から州内にある市町村の詳細な歴史まで取材されており、歴史を扱った部分では、移住過程や労働環境の変化、都市や農村の生活といった点に関して、地域の住民からインタビューが取られている。これに関連して、合衆国雇用促進局（U.S. Works Progress Administration、後に Work Projects Administration）では、1936年から40年にかけて、およそ2,900人の生活史を収集した。短いもので2,000ワード、長いもので15,000ワードに及ぶトランスクリプトは、現在でも合衆国公文書館に保存されている。

大学でのオーラルヒストリー研究は、1948年にアラン・ネヴィンズがコロンビア大学に就任し、オーラルヒストリー収集プロジェクトを開始したことから始まる。これは大学でのオーラルヒストリー研究としては最初のもので、その後にテキサス大学（1952年）、カリフォルニア大学バークレー校（1954年）、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（1959年）などの大学が続いた。この際に聞きとられた対象は企業家・政治家・労働組合の指導者であり、いわゆる「公人」を対象としたジャーナリズム色の強いものだった（Nevins 1966）。1965年に『合衆国オーラルヒストリー *Oral History in the United States*』がコロンビア大学オーラルヒストリー研究所から刊行されたが、この時期までに89のプロジェクトが全米各地の大学で行われていることが確認されている（Sharpless 2006）。

大学や研究所に所属する学者からの聞き取り調査も、合衆国におけるオーラルヒストリーの一分野である。1959年にはNASA口述史プロジェクト（NASA Oral History Project）が始まり、合衆国で研究する自然科学者を対象としたインタビュー事業が開始された。このプロジェクトは現在も続いており、毎年アメリカ科学史に関する書籍を刊行している（Launius 1999）。また、NASA以外にも、アメリカ物理研究所（フィラデルフィア）や化学遺産基金（フィラデルフィア）といった研究所や大学でも大規模な研究プロジェクトや発見に関するインタビュー調査を行っている。

他方、合衆国のオーラルヒストリー収集の特徴として、議会もまたオーラルヒストリー収集に積極的であることが指摘できる。1969年にジョンソン大統領が退陣した際、オーラルヒストリープロジェクトのテープが275本残されたとシャープレス（Sharpless 2006）は述べている。1976年には上院でオーラルヒストリー収集事業が始まり、政治家に対して立法過程や報道されなかった政界の内情などが聞き取られ始めた。

オーラルヒストリー研究は公民権運動（Douglass 1963; Lewis 1995; Nasstrom 2008）

や先住民（Kohn 1997）・女性（Jordan 1982; Moranz et al. 1982）といったマイノリティ集団も対象としている。シャープレスは「オーラルヒストリー研究は、1960・70年代の社会変化を反映している。アメリカ社会にいる様々なエスニック集団の重要さが認識されるにつれて、その集団に属する人々の歴史に対する興味が高まったのだ」（Sharpless 2006: 27）と指摘している。合衆国でも英国と同様、社会運動との関連の中でオーラルヒストリーが収集されていった。1966年にはアリゾナ、フロリダ、ユタ、イリノイ、サウスダコタ、ニューメキシコ、オクラホマ大学でネイティヴ・アメリカンの歴史に関するドリス・デューク・プロジェクト（Dorris Duke Project on Native American History）が始まった。これはタバコ会社の遺産を相続したドリス・デュークからの寄付による。寄付総額はおよそ500万ドル以上で、調査は1972年まで続いた。調査成果の一部は1971年に『先住民であること *To Be an Indian*』として刊行されている（Sharpless 2006）。翌年にはハワード大学（ワシントンD.C.）で公民権運動インタビュー事業が始まり、1973年まで続いた。さらに1976年にはハーヴァード大学ラドクリフ・カレッジで黒人女性オーラルヒストリー事業（Black Women Oral History Project）が始まり、現在も続いている。

地方史においては、1981年にネブラスカ大学リンカーン校で「地域オーラルヒストリープロジェクト（Neighborhood Oral History Project）」が行われた。これは地域の住民からインタビューを行い、大学の保存する写真・地図・新聞記事などと照応させたもので、その後に行われた地方史におけるオーラルヒストリー編纂事業のモデルとなった。さらに1988年にはアップル社から寄付をうけて、アラスカ大学フェアバンクス校がプロジェクト・ジュークボックス（Project Jukebox）を開始した。これはインタビューと写真・地図などを組み合わせて視聴できるように保存したもので、現在も継続している（University of Alaska Fairbanks 2014）。

大学でのオーラルヒストリー教育が正規課程に組み入れられるのに伴い、1990年代からはオーラルヒストリーのマニュアル作成や専門分野化が進んだ。教科書や読本（Ritchie 1994; Yow 1994; Perks and Thompson 2009）が出版されたのはこの時期である。

2000年代からはインターネットを使った資料の収集も盛んに行われており、クリントン政権下で開始された退役軍人歴史プロジェクト（Veterans History Project）はその中でも大規模なものである。これは退役軍人に対するインタビューデータを国内から各地から募集したもので[(2)]、2000年10月に始まり、2003年5月までで7,000件以上のインタビュー

---

(2) 1944年、合衆国陸軍の軍史家S.L.Aマーシャルはノルマンディー上陸に参加し、ヨーロッパ各地で第82空挺隊と101空挺隊にインタビューした。彼はその後ヨーロッパ各地で戦闘体験の証言を収集し、その結果を *Men Against Fire: The Problem of Battle Command* として刊行した（Sharpless 2006）。

が投稿された。現在も継続中である（United States Congress 2014）。

2-3　ラテンアメリカ諸国

メキシコおよび中南米は、ヨーロッパ・北米と並んでオーラルヒストリー研究が盛んに行われている地域だと言われている（Blackburn 2008; Pozzi 2012）。メイヤーによれば、「オーラルヒストリーはかなりの程度、社会闘争の一手段を以て任じている」（Meyer 1996: 348）。そのため、一般的な傾向として農民・労働者・女性・移民・先住民といった大衆セクターの体験・経験が記録されている。

この地域で口述資料の収集が始まったのは、1970 年代のメキシコ・ブラジル・アルゼンチンからである。当初は合衆国のオーラルヒストリー研究から影響を受け、公人の証言を記録して一般に公開するのが目的だった。

1970 年代後半以降は、コスタリカ・メキシコ・エクアドルなどの国において、オーラルヒストリー研究が主に大学以外の場で発展してきた。そこでは労働史・社会史的オーラルヒストリー研究から影響を受け、政治的な基調を持って、先住民コミュニティ、都市労働者、一般大衆を調査対象にした（Scwarzstein 1996）。さらに 1980 年代半以後、軍事独裁政権が各国で終焉する中、オーラルヒストリー研究は一層の発展を遂げた。現在では労働者階級・心性史・田舎から都会への移住・インド系文化・ジェンダー・教会の役割・コミュニティ研究・エリート研究まで、調査の対象が広がっている。ただし、在野の研究者や団体による資料の収集が発展しているにもかかわらず、アカデミックな世界とはオーラルヒストリー研究プロジェクトとがうまく結びついていないという問題が指摘されている。

中南米諸国のオーラルヒストリー研究は、不安定な政治情勢の中で独自の発展を遂げてきた。ブエノスアイレス大学歴史学科で教鞭をとるパブロ・ポッジはラテンアメリカにおけるオーラルヒストリー研究の現状を鑑みて次のように述べる。

> 私たちはヨーロッパや合衆国のアーカイヴが羨ましく思えてならない。整頓され、保存され、手間をかけられているアーカイヴが。金銭的余裕があり、国家やその支配的集団が、歴史的な記憶を、断固たる総意とヘゲモニーを確立するのに貢献すると考えるから、そのようなアーカイヴが設立されるのだ。我々はそうはいかない。ラテンアメリカのオーラルヒストリー研究者にとって最も重要な問題はこうだ。私のインタビューは、一般にアクセスできるようなアーカイヴに保存されるのだろうか？その場合、アクセス可能であることは何を意味し、どういうことが起こり得るだろうか？国家機構のほとんどに腐敗が蔓延している社会において、記憶を保存するために何ができるだろう？海外

に売却されたり、権力者が有害だと見なした時に破壊されたり、文書やテープが廃棄されたりするのを防ぐために、どうしたらいいだろうか？（Pozzi 2012: 4）

国によって調査の対象と方法は多様だ。メキシコは1972年にオーラルヒストリーアーカイヴ Archivo de la Palabra が設立され、1910年代のメキシコ革命、公教育の発展、映画産業の発展、医療史、スペイン難民の記録を収集するなど、オーラルヒストリー研究が最も早くから始まった国である。主に歴史証言の収集（Poniatowska 1993, 1998）と社会史研究という2つの分野でオーラルヒストリーが収集されている。

ブラジルでは1973年にブラジル現代史資料研究所（Centro de Pesquisa e Documentação de História Contemporânea do Brasil）が始まり、歴史証言の収集が始まった。1975年からはジェトゥリオ・ヴァルガス基金（Getulio Bargas Foundation）が政治指導者にインタビューを行い、軍事政権（1964-1985）に至るまでの政治プロセスを語った証言を記録した。同時に、1975年から77年にかけては、ブラジル・プロ・アムネスティ委員会が軍事政権被弾圧者への聞き取りを行っている。1994年にはブラジルオーラルヒストリー学会（Brazilian Oral History Association）が設立された。

アルゼンチンでは1970年、合衆国コロンビア大学の主導により、民間研究所トルクァト・ディ・テラ研究所 Institute Torcuato di Tella 内でオーラルヒストリー事業が始まった。この事業では労働運動の指導者や市民活動家に対して聞き取りが行われ、その後のアルゼンチンにおけるオーラルヒストリー研究の方向を一定ていど決定した。労働史中心で、かつ軍事独裁政権の終了後にオーラルヒストリー研究が発展したという点では、ウルグアイとチリも共通している（Schwarzstein 1996）。

都市の住民や炭鉱労働者を調査の中心としたこれらの国々に対して、コスタリカ・ニカラグア・エクアドルのオーラルヒストリー研究は農村を調査地とした。コスタリカにおけるオーラルヒストリー研究の中心となったのはコスタリカ国立大学で、1976年から78年にかけて農民自伝コンクールを開催した。これはコスタリカの農地改革プロセスに対するアセスメント事業の一環であり、従って農村の日常生活とその変化に個々人の視点から光を当てることとなった。エクアドルでは農業史・農村研究でオーラルヒストリーが収集されたが、この際に農村の多い高地・アマゾン川流域において、先住民の歴史が聞きとられることとなった。ニカラグアでは1979年にサンディニスタ政権が成立した後、農村での識字運動の中でオーラルヒストリー収集事業が始まった。ボリビアでは1983年、アンデス・オーラルヒストリーワークショップ（Taller de Historia Oral Andina：THOA）が結成され、先住民に対するオーラルヒストリーインタビューの中心的な存在となった。

各国でのメキシコおよび中南米諸国では、ラテンアメリカという枠組みでオーラルヒストリー研究のネットワークを設立する動きも盛んだ。国際オーラルヒストリー学会は1996年に発足したが、ラテンアメリカ諸国に多くの学会員がいることから、ウェブサイトは英語とスペイン語の二か国語で表記されている。また2010年にはラテンアメリカ口述史ネットワーク（Latin American Oral History Network）が設立され、研究者同士の交流や共同研究が試みられている。

2-4　東アジア・オセアニア・アフリカ諸国

東アジアにおいては、オーラルヒストリー（中国語で口述歴史）は、台湾・香港・シンガポールを中心に行われている。台湾では中央研究院近代史研究所が1955年以来口述資料を収集し、雑誌『口述歴史』や『口述歴史叢書』を刊行してきた。口述歴史叢書では政治家・医者・芸術家などの個人史や結婚や家庭生活の習慣を記録したもの（臺灣省文獻委員會編1993）、さらには戒厳令下の市民生活を主題としたもの（黄1999）もある。また台湾歴史館の口述歴史叢書も同様に、民主化運動（林水泉2004）の記録としてオーラルヒストリーを公開している。2013年には中華民国文化部がオーラルヒストリーデータベースをインターネット上で開設する予定を発表した（中華民国文化部2013）。その発表によれば、台湾各地に50か所以上のオーラルヒストリー記録所が設けられ、300人以上の訓練を受けたボランティアスタッフが最寄りの記録所で記録を支援する。家庭内の高齢者や親類とともに記録所に行き、録音することが奨められている。

香港では、中国返還以後、2000年代に入ってから急速にオーラルヒストリーの収集が進んだ。まず2000年には香港中央図書館で香港オーラルヒストリープロジェクト（Hong Kong Oral History Project）が始まり、翌2001年から2004年にかけては香港大學アジア研究センターがおよそ200人からオーラルヒストリーを収集した。これは政治・経済・教育／学校・文化／新聞・社会集団（移民・華僑など）・社会生活（抗日運動・家族と婚姻・女性・福祉・宗教など）・コミュニティといった話題について語られたデータを保存しており、一部はウェブ上で聞くことが出来る（Hong Kong Oral History Archives）。

東南アジアでオーラルヒストリー研究というと、シンガポールが挙げられる。以下で指摘されている通り、東南アジアではエリート・オーラルヒストリーが盛んに行われてきた。そのエリート・オーラルヒストリー研究を牽引してきたのがシンガポールである。

> 東南アジアでは、エリートに対するオーラルヒストリーインタビューを行い、語られる事柄をよりよく理解するのは、2つの要素によって妨げられてきた。1つは、年齢や

権威の違いを強調する社会において、インタビュアーはインタビュイーに対して、自らの社会的立場が公平でないことを意識し、インタビュイーの地位に恐れをなさないよう、また話題のコントロールを失わないよう、かなり神経を使わなければならないという点だ。もう1つはより根本的な問題だが、東南アジアには独立した学術営為という伝統がないという点だ。……ポストコロニアルな国々の中で行われるとき、歴史研究は「国益」や「国家建設」と思われるものを推進する重荷を負うことになる。（Hong 2000: 35-36）

東南アジア諸国のオーラルヒストリー研究者を集めてColloquium on Oral Historyがマレーシアで開催されたのは1978年である。同年、シンガポール口述史センター（Singapore Oral History Center）が設立された。同センターは1980年に「シンガポールの先駆者Pioneers of Singapore」、1989年に「シンガポールの共同体（Communities of Singapore）」というオーラルヒストリー収集事業を行い、主に企業家・政治家に対してインタビューを行った。両プロジェクトの中心人物となったはプログラムの目的を次のように述べている。

目的は、先駆的な経営者にインタビューし、彼らの「立身出世rags-to-rich」談と、彼らがシンガポールにおける経済・社会・教育の発展に果たした貢献を記録することだった。……彼らのサクセス・ストーリーは先駆性や勤勉さ、倹約と野心を示し、若い世代にとって魅力的であると同時に教育的でもある。（Lim 2000: 56）

このようなオーラルヒストリー収集事業に関して、桝谷（2007）はシンガポールにおける大規模なオーラルヒストリー収集事業が、シンガポールのナショナル・アイデンティティ形成のために行われていると指摘している。マレーシアやタイでもオーラルヒストリー収集事業は行われているが、それらもまた政治家や企業経営者などを対象としている。1992年にはASEAN加盟国のオーラルヒストリー研究者が、ASEANオーラルヒストリー学会ASEAN Oral History Colloquiumを開催した。

オーストラリアでは退役軍人から従軍体験を聞き取ったり、移民の家族史を口述で記録したりしたものが文書館に保存されると同時に、先住民に対するオーラルヒストリー収集事業が大規模に行われている。国立文書館では家族史研究が奨励されており、メルボルンの移民博物館やオーストラリア国立博物館では移民の個人誌を聞くことが出来る。またオーストラリア音声・映像アーカイヴでは、ウェブ上で「オーストラリア個人誌（Australian Biography）」が開設されており、オーストラリア現代史の重要人物の個人誌を読みその音

声を聞くことが出来る。

先住民に対するオーラルヒストリー収集事業は、土地権利回復運動と関連しながら90年代半ばから行われてきた（Kennedy 2001）。と同時に盛んに行われてきたのが、いわゆる「失われた世代」と呼ばれる、親元から強制的に離されて養育されたアボリジニの子供たちに対するインタビュー調査である。まず1998年から2002年にかけて「(The Bringing Them Home Oral History Project)」が行われ、先住民だけでなく、子供の引き離しに関わった宣教師・警察官・行政官に対してインタビュー調査が行われた。2001年には上院で調査報告書 *Lost Innocents, Righting the Record: Report on Child Migration* が出され、2004年には同じく報告書 *Forgotten Australians: A report on Australians who experienced institutional or out-of-home care as children* が公表された。2009年にはラッド首相（当時）がアボリジニに対するこの国家的な家族離散を行ったことを公式に謝罪し、これを受けてさらに「Forgotten Australians and Former Child Migrants Oral History Project」が発足した。

アフリカでは、1989年にSOSサヘル口述史プロジェクト（SOS Sahel Oral History Project）が行われた。これはセネガル・モーリタニア・マリ・ブルキナファソ・ニジェール・チャド・スーダン・エチオピアの8か国にまたがり、467人から、失われつつあるサヘル地域の伝統的な生活様式を記録した。

> 多くの子供たちは今や正規の学校教育を受けることが出来る。これは彼等自身の経済的な見通しを明るくさせるが、文化的伝統を失わせもする。伝統的な知識は外部の人間にとっても、若い村人たちにとっても「時代遅れ」だと考えられている。伝統的な知識を記録することは、その忘却を防ぎ、価値を若い世代に示すことである。サヘル地域の環境・経済的プレッシャーは、ともに組み合わさって、前例がないほどの社会的転移の時期を生み出している。経済的・社会的・移り的な変化を扱った学術的分析は、客観的である反面、直接の証言に欠けており、これらの激変における重要な側面を捉えられていない。(Cross and Barker 1991: 247)

90年代以降は、南アフリカを中心に民衆の記憶（popular memory）研究が進んでおり、ケープタウン大学にPopular Memory Centerが設立されている。ここではアパルトヘイト時代の隔離収容経験者やHIV感染者、難民といった人々の個人誌だけでなく、民謡や労働・余暇といった事柄を口述記録で収集している。南アフリカオーラルヒストリー学会は2005年に設立され、アパルトヘイト時代のオーラルヒストリーを中心に、資料の

収集と分析が行われている。また、HIV 感染者の生活史を聞きとったもの（Oppenheimer 2007）や内戦の被害を聞きとった研究が数多く表れている。

3　3つの類型

ここまで論じてきたオーラルヒストリー研究は、大きく分けると3種類の集団・経験を対象としてきた。すなわち、都市や農村の労働者、女性、エスニックマイノリティなどを対象とするものと、企業家や政治家などを対象とするもの、そして戦争や独裁政権の被害者から被害の語りを聞き取るものである。前二者におけるオーラルヒストリーは歴史研究の道具であるが、最後のものは歴史研究を目的とはしていない。この3つの類型を便宜的に「下からの歴史」型、エリート・オーラルヒストリー型、真相糾明・エンパワーメント型と呼ぶこととし、以下、順に整理する。

3-1 「下からの歴史」

オーラルヒストリー研究を整理する1つの軸は、調査対象の違いである。すなわち、労働者階級を対象とするか、政治家・企業経営者・専門職を対象とするかという違いがある。単純化すると、これは労働史・社会史の調査方法としてオーラルヒストリーを用いるか、エリート研究としてオーラルヒストリーを用いるかの違いと言い換えられる[3]。

アリステア・トンプソンは「1950年代から60年代にかけて、オーラルヒストリー研究の先駆者たちは、民俗学と最も深い関係を持ち、いわゆる「普通の」労働者の経験を記録することに関心を持っていた」（Thompson, A. 2006: 51）と述べ、オーラルヒストリーが民俗学研究と労働運動の両方に関係しながら発展してきたことを指摘している。英国におけるオーラルヒストリー研究は、同時期にバーミンガム大学やエセックス大学で盛んになっていたネオ・マルクス主義運動やカルチュラルスタディースの興隆とも軌を一にしていた（Thompson, P. 2000=2002: 122-3）。

オーラルヒストリー研究が歴史研究の一分野としてではなく、既存の歴史学へのアンチテーゼとして興ってきたことは、多くの研究者が指摘する通りである。

オーラルヒストリーインタビューを通して、私たちはいかに歴史が構築されるかを探

---

[3] この違いはシュワルツスタイン（Schwarzstein 1996）が「イギリス式」と「アメリカ式」と呼んだものにも対応している。

求するための糸口になるような証拠を整理することができる。それも、読者を意識した文学的作品を通じてではなく、広範な人々の経験によって。オーラルヒストリーインタビューを通じて、人々は自分たちの存在を自分たちの世界の中に位置づけるべく努め、また自分たち自身の世界理解に権利を要求するのだ。（Grele 2006: 91）

「反 - 歴史 anti-history」の探求は、連合王国におけるオーラルヒストリーの起源の、まさに中心だった。オーラルヒストリーは 1960 年代から、資料と方法の両方において権威に挑戦するために、歴史研究者に明確な社会的役割を与えた。すなわち彼らは、女性・子供・労働者階級、そして肌の色や性的志向によって異なった存在であるとステレオタイプ視されてきた人々の、隠された歴史に声を与えようとしたのである。（Bornat 2001: 221）

英国におけるオーラルヒストリーの収集は、大学内における歴史学研究の一潮流だったと同時に、大学外における成人教育のツールでもあった。成人教育を担ったのは大学に籍を置く歴史研究者ではなく、既存の歴史学の限界や矛盾を指摘し、オーラルヒストリーを歴史学の変革運動の手段として用いようと試みた人々だった。彼らは 1982 年に、オーラルヒストリー研究とは「社会主義、あるいはフェミニズム的政治とアカデミックな歴史学とを関連付けよう」（Popular Memory Group 1982: 75）と試みる者の関心に最も近いと主張した。

大学の内外における関心の高まりに対応して、「下からの歴史」型オーラルヒストリー研究は、労働者や農村・漁村の住民の心性、あるいは彼らの日常生活に注目し、データを収集してきた[(4)]。そして、女性史研究の一翼を担ってきた（Gluck 1977）（Bornat & Diamond 2007）

しかし、「下からの歴史」の試みが即ち「歴史の民主化」につながるわけではないことにも留意しておかなければなるまい。

例えば、オーストラリア国立文書館や、メルボルンとアデレードにある移民博物館では、移民の家族史の収集を支援してきた。その中には当然、オーラルヒストリーの収集も含まれる。音声資料の展示や保存、収集の促進といった事業は、オーストラリアにとって、国民１人１人をオーストラリアなる国家の一員として形成する手段でもある。シンガポール

---

(4) 現在、大英図書館オーラルヒストリーアーカイヴには手工芸、エスニシティ／ポストコロニアリズム、工業・農業・就労、在英ユダヤ人の経験とホロコーストの証言、セクシュアリティ・リプロダクティブヘルス・売春、社会政策・社会運動、女性史といった項目でインタビューデータが収集されている（British Library 2014）。

における企業経営者のオーラルヒストリー収集事業も、国家が大学などの研究機関に依頼して始まった、ナショナル・アイデンティティ構築のためのプロジェクトである。

軍隊におけるオーラルヒストリー収集事業と戦争体験の手記もまた、多様な方向から考察されるべきだろう。兵士が従軍体験を語る時、それは戦場体験をつづった「下からの歴史」であり、暴力の被害の記録であると同時に、国家による暴力の担い手による「役立つ」記録でもある。同じくオーストラリアにおいて、第一次世界大戦で多大な被害を受けたオーストラリア・ニュージーランド軍団（Australian and New Zealand Army Corps）が、オーストラリアのナショナル・アイデンティティ形成の有力な手段であることは、多くの研究が指摘している通りだ（Thompson, A. 1990; Hamilton 2003）。「下からの歴史」は、それが「自分たちの存在を自分たちの世界の中に位置づけるべく努め」た結果であるが故に、「自分たち自身の世界観」を通じて国家への無媒介なつながりを生み出すことも出来るのだ（Grele 2006: 91）。

3-2　エリート・オーラルヒストリー

他方、オーラルヒストリーが軍人・企業経営者・政治家・専門職といった人々を対象とする場合も多い。この、いわゆる「エリート・オーラルヒストリー」の特徴を端的に示すと、「公人の、専門家による、万人のための口述記録」（御厨 2002: 5）ということになるだろう。例えば、以下に引用するオーストラリア陸軍歴史部の文章は、軍事行動の専門家あるいは参加者によるオーラルヒストリーが、軍隊に適応するための教材として用いられると述べている。

> オーストラリア陸軍では、オーラルヒストリーは以下のように定義されている。オーラルヒストリーとは、特定の主題あるいは問題に関与している参加者あるいは専門家によるもので、彼らの決定や記憶を保存するものである。オーラルヒストリーの素材（音声、動画、文字起こししたインタビュー原稿、インタビュー時のメモ書き）は、公的な文書に通常は保存されない情報を含んでいることがあり、したがって公式な文書の補助をなすものだが、公文書の代わりになるものではない。「オーラル」ヒストリーとは呼ばれているが、この情報源は今日の兵士ならびに司令官たちにとって特に有用である。いくつか例を挙げれば、過去の作戦や事件は、今日の特別な政策や論説において再解釈され得る。もし巧みに利用されるならば、オーラルヒストリーは軍事教練センター、陸戦研究センター、司令部第１部、オーストラリア陸軍歴史部などの支援組織が提供する、軍隊適応グループの補助教材となるだろう。（The Australian Army 2012）

エリート・オーラルヒストリーは、議会や軍隊といった国家組織からだけでなく、企業から援助を受けて調査される場合も多い。合衆国では大企業からの資金援助を受けた大学や、時には大企業内部の社史編纂室が、オーラルヒストリーの収集を担っていた。パークスは「合衆国の大学に本拠地をおく初期のオーラルヒストリー事業は、多くの場合、企業からの資金提供によって研究資金を得ていた。結果として、近年まで、英国のオーラルヒストリー研究者が忌み嫌っていたような、企業との親しい連携関係が生まれていった」（Perks 2010: 221）と述べ、合衆国におけるオーラルヒストリー研究は英国における労働史的オーラルヒストリー研究と対照的だと述べている。

> オーラルヒストリーのコレクションは、しばしば大規模かつ現在進行中のビジネス・ヒストリーアーカイヴで編纂されている。従業員の多くは企業に雇用された司書で、独立した企業史家から助言を受ける場合もある（アメリカ司書学会 The Society of American Archivists には、オーラルヒストリー部門とビジネス・アーカイヴ部門の両方がある）。ウェルズ・ファーゴ社、マニュファクチャーズ・ハノーヴァー・トラスト社、アトランティック・リッチフィールド社といった大企業の多くは、著名な司書や歴史プロジェクトを擁しており、その中にオーラルヒストリーが含まれていることも多い。自社の歴史を記録する中小企業も増えつつある。企業のアーカイヴの一環としてオーラルヒストリー事業が行われれば、事業メンバーがその企業の文書記録に十全なアクセスを得られる利点がある。他方で、上級管理職や会社の重大な決定のほうに目が向けられ、企業の日々の生活が無視されがちになる可能性もなくはない。スミソニアン協会による国立アメリカ歴史博物館の文書館は、ペプシコーラ、マルボロ、アルカセルツァーの3製品の宣伝キャンペーンに関するオーラルヒストリー事業を行っている。（Ryant 1988: 561）

同じ「オーラルヒストリー」であっても、政治家や軍人・兵士、企業経営者を対象とするものと、農業・漁業従事者や肉体労働者を対象としたものとでは、起源も着眼点も全く異なることに注意しなければならない。すなわち、エリート・オーラルヒストリーは、文書化されなかった政策立案過程、軍事作戦が決定されるまでの軍団内部でのやりとりや戦場での経験、企業の創設と発展プロセス、経営判断の転換といった事柄に関心を向けてきた。パークスはこれもまた、歴史を研究する上で重要な要素だと指摘する。

「歴史重視」であるはずの英国が、「未来志向」で「金銭重視」な合衆国よりも自分たちの歴史と伝統に敬意を払っていないという皮肉は、長いあいだ私の頭から離れなかった。思うに、この対照的なエートスは、階級というものに対するアメリカ的な態度、合衆国の社会の同化的傾向、上下関係を壊そうとする固有の欲望、すなわち排除するのではなく包摂しようとする欲望に由来するのではないだろうか。しかし、英国と合衆国のオーラルヒストリー研究者にみられる、これらの本質的差異に気付き説明することよりも、英国のオーラルヒストリー研究を特徴づけているものを指摘するほうが重要だろう。すなわち、英国のオーラルヒストリー研究は、国の経済を支え何百万人もの人々に影響を及ぼした社会の重要な部分を、イデオロギー的に毛嫌いしてきたのだ。均衡を取り戻し、声なき人々に声を与えようという決意のもと、私たちは今や失われてしまった多くの人々の話と経験を、同じように見逃してしまった。（Perks 2010: 221-222）

対象を何にするかという対立軸はしばしば、歴史学的か、ジャーナリズム的かという、調査手法をめぐる差異とも重なっている。出来事の知られざる側面を、関係者からのインタビューを通じて明らかにする手法は、オーラルヒストリー研究でも採用されてきた。合衆国におけるオーラルヒストリー研究の創始者アラン・ネヴィンズの前職が新聞記者だったことは偶然ではない。

合衆国やカナダでは、ラジオの収録スタジオに著名人を招いてインタビューを行う番組がしばしば企画されてきた。例えばカナダでは、第2次世界大戦に従軍した兵士が登場して従軍体験を語る「フランダースの平原で（In Flanders Fields）」というラジオ番組が1964年から65年まで放送され、後にカナダ国立オーラルヒストリーアーカイヴの基礎となった（Grele 1996）。また、合衆国ではスタッズ・ターケルによる「スタッズ・ターケル・プログラム」が1952年から1997年までラジオで放送された。これはターケルがキング牧師、レオナルド・バーンスタイン、ボブ・ディラン、ドロシー・パーカーといった著名人に収録スタジオでインタビューを行う番組で、52年間にわたって人気を博した。

パークスが指摘するように、「下からの歴史」を意図するオーラルヒストリー研究は、しばしばエリート・オーラルヒストリーを軽視することがある。しかしペプシコーラ社のオーラルヒストリー事業「「ペプシ世代」のオーラルヒストリーと記録コレクション（The "Pepsi Generation" Oral History and Documentation Collection）」が、ペプシコーラの宣伝に携わったプロデューサーや社長だけでなく、瓶詰業者や出版社に対しても聞き取りを行ったように（Taylor 2007: 151-2）、エリート・オーラルヒストリーもまた独自の必要のもと発展してきた。それは必ずしも「下からの歴史」と対立するものではない。どちら

かといえば同時代の別の集団を調査したものとして、補完し合う関係と見る方が適当ではないだろうか。

3-2 真相究明とエンパワーメント

上述した「下からの歴史」型オーラルヒストリー研究も、エリート・オーラルヒストリー研究も、ともに歴史研究の手段として口述資料も用いるという意味において、「オーラルヒストリー」と称されている。これら以外に、学術研究以外の手段としてのオーラルヒストリーがある。このオーラルヒストリー収集事業においては、何らかの調査のための手段としてではなく、政治運動・医療・教育といった分野の目的を達成するために、口述で個人史あるいは体験談が聞きとられ、それらがオーラルヒストリーとして発表されている。

戦争や人権侵害、疾病といった被害経験を対象に、被害者を救済し加害者を処罰することを目的としたオーラルヒストリー収集事業は、大戦や虐殺、独裁といった惨禍を被った地域・集団において、しばしば真相糾明運動の一環として行われる。この系譜に連なるオーラルヒストリーとしては、ナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺の生存者に対する聞き取りの収集事業が最も早いものである。ドイツやポーランドで、ナチス政権期から第2次大戦にかけての亡命や被害の記録が聞きとられてきたことは第2節で述べたとおりだが、最も大規模かつ初期の試みは合衆国で始まった。1970年代初頭には、ヤッファ・エリヤが生存者・証言者から証言を収集し、後にニューヨークに設立されるホロコースト研究センターの基礎を築いた。1979年にはドリ・ラウブとローレル・ヴロックによってホロコースト生存者録画事業（Holocaust Survivor's Film Project）が始まった。1994年に『シンドラーのリスト』が公開された後、監督スティーヴン・スピルバーグはその収益金でショアー映像基金（Shoah visual History Foundation）を設立した。この基金は57か国から5万人以上の証言を収集している（Klempner 2000）。

アルゼンチン、チリ、エルサルバドル、グァテマラなどでは、長期にわたった軍事政権が崩壊した後、真実和解委員会が組織され真相糾明運動が始まった。真相糾明運動においては、被害者の聞き取りが、過去の出来事を明らかにし、被害を補償する主な手段の1つとなった。南アフリカにおけるオーラルヒストリー研究は、アパルトヘイトの被害の聞き取りとその後の真実和解委員会の活動によって発展した側面が大きい。

また、聞き手やメディアを前に証言する行為が、政治的パフォーマンスとなる場合もある。ウェスターマン（1994）によれば、1987年、エルサルバドルの聖サルバドル教会で、北米メディアに対して証言集会が開かれた。これはエルサルバドル、グァテマラ、ホンジュラスから逃れてきた難民たちが開いたもので、合衆国とカナダの住民に対して、内戦によ

る日常的な暴行・誘拐・レイプ・殺人といった暴力が横行している事実を伝え、支援を呼びかけることを目的としていた。ウェスターマンは「難民の証言は、個人的なものでありながら、国家や支配的文化の公的メディアには記録されない歴史の一部分を伝えるという、本質的な役割を持っていた」と述べる。多くの聞き手を前に証言する行為は、政治的意図を持ち連帯を求める活動であると同時に、過去に受けた破壊と暴力を意味付け、ある種の社会的理想を求める動機へと変換するという治癒的機能も併せ持つ（Westerman 1994）。

戦争体験者や日本軍性奴隷（「従軍慰安婦」）被害者、あるいは虐殺の生存者の証言を語り聞く場を設ける行為は、単に体験を伝えるだけでなく、その体験を繰り返さないための活動の一つでもある。同時に、語り手にとって、過去に自らが受けた被害の経験が否定されることなく、歴史的事実であると認定されることは、自己の尊厳を回復する手段を手にすることでもある。キルバーンは次のように述べ、オーラルヒストリー研究の持つ潜在的な力を評価する。

> オーラルヒストリーの出会いの中で語り、聞く行為は、人間的なつながりと共感を生み、オーラルヒストリーを他の方法論から区別するラポール、あるいはフローを形成する。おそらく、この洗練されていない、ぎこちない場にこそ、オーラリティの変革の力が潜んでいるのではないだろうか。慰め、癒し、和解させる力が。（Kilburn 2014: 1）

しかし、このような出会いの場を設けること自体が難しいのも、この種のオーラルヒストリー研究のもつ特徴だと言える。被害の語りは、政権交代や国連による介入など、その被害が認定されうる状況が到来しなければ、語られる可能性が極めて低い。スハルト政権下のインドネシアにおける「共産主義者」の虐殺を生き延びた人々に対する聞き取りに関する以下の指摘は、現在のインドネシアの政治的情勢が調査そのものを困難にさせていることを示している。

> 私たちは、国中で、何千人もの人々が虐殺されたに違いないと知っている。しかし、明確で詳細な記録はそのうちたった１つに関してしか収集されていないのだ。オーラルヒストリー研究者はこれらの虐殺に関する非常に基本的な事実から、ときには殺害を虐殺とカテゴリー化するのが妥当かどうか決めるところから、難題に直面する。……何が本当で、何が間違っているかの区別すら難しい。1965 年から 66 年にかけて起こった暴力に関するオーラルヒストリーは、書かれた資料によって既に知られていることを補充したり、改訂したり、確認したりするためのものではない。そもそも、研究者が大量殺

人の「ミクロなダイナミクス」と呼ぶようなものの水準ですら、何もわかっていない。国家規模のこととなれば尚更だ。（Roosa 2013: 3）

口述資料による真相糾明運動は、一方で被害の語りを収集し責任者を処罰する政治・社会運動に関連しつつ、エンパワーメントという点において、回想法（reminiscence therapy/ life review）とも関連を持つ。回想法の源流は心理療法にある。1963 年、バトラーは適切な指導を受けてなされれば、人生を回顧する行為は高齢者にとって治癒的な効果をもたらし、より尊厳あるケアを可能にすると論じた（Butler 1963）。「オーラルヒストリーが記憶の内容に焦点を当てるのに対して、回想法の特徴は、参加者にとってのプロセスと結果により注目する」（Bornat 2001: 223）と述べられている。

オーラルヒストリーと回想法とは、コインの両面である。どちらも記憶を扱っているが、オーラルヒストリーはまずもって歴史を理解することに関心を持つ。それに対して、回想法は何よりも語り手にとって思い出す行為の持つ価値を重視している。（Perks and Thompson 2009: 447）

イギリスでは 1980 年代から高齢者に対する回想法が進展した。これは幼少期・青年期の労働・家族・余暇などについて語ってもらったり、時にはグループディスカッションを試みたりするもので、酒井（2006）によれば 1996 年の時点で、全国 1,000 か所以上の高齢者向けデイサービスセンターや病院などで行われている。

同様に、オーラルヒストリーの収集プロセス自体を目的とする事業として、教育としてのオーラルヒストリー研究を外すことは出来ない。オーラルヒストリーの収集が、大学内部での歴史学の刷新運動であったと同時に、大学外での成人教育のツールでもあったことは、本節第 1 項で述べた通りだ。フックら（Ng-A-Fook et al. 2012）によれば、合衆国ジョージア州の Rabun Gap-Nacoochee 中学校で始まった「Foxfire Project」が、初等・中等教育におけるオーラルヒストリー収集プロジェクトの嚆矢となった。本来、中学生のライティングの授業の一環だったこのプロジェクトは、学校のあるラブン郡の高齢者からオーラルヒストリーを収集し、その成果を *Foxfire* という雑誌で発表した。

クーンとマクレランによれば、家族や親族・知人からオーラルヒストリーを収集することは、「地元の声やなじみのある場所が、それまで教科書の中にしかなかったアメリカ史の流れに結び付けられる」ことによって、そして高齢者が、自分たちが対象となって収集されたオーラルヒストリーの記事や展示、ウェブサイトを見る事によって、生徒とコミュ

ニティ双方に影響を及ぼした（Kuhn and McLellan 2006）。

オーラルヒストリーは、歴史研究の手段（新たな資料）以外としても活用されてきた。戦争や虐殺・政治的抑圧の被害者からその経験を聞きとる行為は、ただし、このような語りによる政治運動は、加害者とされた側が語られた出来事や経験を事実と認め、補償しなければ、その目的を達したことにならない。被害を受けたことが歴史的事実として認定され、それが歴史を書き換え、現在と将来との政治に影響を与える必要がある。他方で、自らの受けた経験を被害として語ることは、回想療法とも共通する効果を持っている。過去を語る行為は、自尊感情を高め、世代間交流を促進し、自己の統合を高める効果を持つ（Butler 1963）。このようなエンパワーメント効果は、真相糾明運動の一環としてのオーラルヒストリーと共に、教育手段としてのオーラルヒストリーにも通じるものであると考えられている。合衆国の教育現場で採用されたオーラルヒストリー収集事業は、教育施設のある地方の歴史を住民から収集する事業であり、歴史や国語など複数の科目にまたがる総合学習の一環でもあり、インタビューの実施から公開までのプロセスを通じたコミュニティの活性化事業でもあった。

4　結論

本稿では、各国で行われてきたオーラルヒストリー研究の歩みを確認し、それを3つの類型に整理してきた。オーラルヒストリーは複数の源流をもち、様々な国々で発展してきた。ひとつの源流は民俗学研究と労働運動であり、この2つはどちらも、それまで歴史学で取り上げられてこなかった「普通」の人々に目を向けさせる効果を持った。もうひとつの源流はジャーナリズムであり、こちらは、政策・企業の経営方針・軍事作戦といった国家規模の事件が、どのようなプロセスを経て決定されるのかという点に目を向けさせる効果を持った。

これらの、源流を異にするオーラルヒストリー研究は、しばしば「下からの歴史」対「エリート・オーラルヒストリー」、「イギリス型」対「アメリカ型」という風に、対立するものと見られた。オーラルヒストリーが「下からの歴史」の方法となった場合、オーラルヒストリー研究とは既存の歴史学――「文献至上主義」で「権威主義的」で「政治史中心」であるとオーラルヒストリー研究者が考えた学問――を改革する手段だった。

オーラルヒストリーの転換点は、新しい社会史や1960・70年代に発生した政治情勢、社会変革の運動によって形成された。学術上の体制、特に当時は支配的だった「上から

の歴史」に挑戦しようと試みた歴史学者や、周縁化された集団の経験を探求するための方法として階級分析の復活を願っていた人々は、自らの手で書いた記録や自らの語った声をそれほど多く残していない歴史的行為者を表舞台に登場させ得る方法を歓迎した。『オーラルヒストリー・フォーラム』の初期の目次を見ると、オーラルヒストリーが女性・労働者階級・移民／エスニック集団の歴史を扱う研究者（その多くは重なった分野で仕事をしていた）から熱狂的に受け入れられていたことがわかる。（Sangster 2013: 2）

しかし、実際のところ、オーラルヒストリーは常に「上からの歴史」に挑戦するものというわけではない。それはエリート・オーラルヒストリー研究を見れば明らかである。また第3節で論じたとおり、「下からの歴史」の収集が、ナショナル・アイデンティティ構築のプロジェクトとして、国家によって推進される場合もある。他方、軍隊の作戦立案や軍事展開の様子、企業の製品開発や宣伝、立法・行政機関の活動を明らかにすることが、「下からの歴史」や歴史の民主化を目指す活動と対立関係にあるわけでもない。企業による企業の歴史収集事業によってしか記録されなかった「普通の人々」の記録もある。どちらかと言えば、歴史を民主化しようと試みた調査者が、農村の住民や都市の労働者を歴史の主人公とすることによって、「下からの歴史」を書こうとしたという方が実態に近いのではないだろうか。歴史学なるものを刷新しようとした人々の手段として、都市や農村で生活する「普通の人々」や、彼らの話す事柄が注目されたのである。

歴史研究以外の手段としてのオーラルヒストリー収集事業に目を向けると、真相糾明・回想法・教育手段としてのオーラルヒストリー収集事業が、それぞれに歴史研究としてのオーラルヒストリーと一部で関心を共有していることがわかる。すなわち、真相糾明運動としてのオーラルヒストリー収集は、過去の出来事を明らかにし、歴史を書き換えるという目的を持つ点で、フリッシュいうところの「もっと歴史を（more history）」（Frisch 1993）というオーラルヒストリーの古典的関心を共有している。回想法は自己の統合や自尊感情の高まりという効果を狙う点で、成人教育としてのオーラルヒストリーに共通した関心を持つ。そして教育としてのオーラルヒストリーは、オーラルヒストリーの収集という作業――インタビューを行い、その結果を何らかの方法で保存し、展示することも含めて――が、教育として有効であるという視点に立っていた。

本稿は、オーラルヒストリー研究と呼ばれているものが何をしてきたのかということを検討してきた。その結果、学術研究の手段としてのオーラルヒストリーは、「下からの歴史」とエリート・オーラルヒストリーとに分けられること、それ以外の目的に供する手段として真相糾明運動・回想法・教育活動の3種類が挙げられることを述べた。

オーラルヒストリー研究は、それぞれ異なった政治的・社会的背景から出発している。労働者やマイノリティを対象としたオーラルヒストリー研究は、今まで歴史の表舞台に登場することのなかった人々の視点から歴史を書くことで、歴史学の変革という目的を達成しようとした。エリート層や中産階級に対する聞き取りは、マスメディアの発展を背景とし、「内幕 behind-the-scenes」を明らかにしてきた。被害の語りが聞きとられ研究される対象となるには、世界大戦や冷戦、世界各地の独裁体制や民族紛争などを背景とし、同時に、戦争の結果生じてきた被害は救済されるべきだという政治的信念や制度が設けられる必要があった。

> オーラルヒストリーは常に変革のための道具であるわけではない。オーラルヒストリーが何であるかは、それが使われるときの精神による。とはいえ、オーラルヒストリーは確かに、歴史の内容と目的とを変えてしまう。教師と生徒との、世代間の、教育機関とその外側の世界との間にある壁を壊し、歴史を書くときに――書物の中であれ、博物館の中であれ、ラジオや映画の中であれ――歴史を作り、経験した人々に、その人々自身の言葉によって、中心的地位を取り戻させる。（Thompson, P. 2000: 18）

上でトンプソンが述べている特性は、必ずしも口述の史料にだけ当てはまる特徴ではない。文書資料もまた、歴史の参与者が自らの視点を自らの言葉で記録したものだ。歴史の内容と目的とを変革するのは、口述の資料でなければならないわけではない。

にもかかわらず、本稿で述べてきたような、多様な目的と対象を貫くオーラルヒストリーの共通性を仮に要約するとすれば、上述のトンプソンの言明が最適ではないだろうか。ここでトンプソンが示しているのは、オーラルヒストリーが求められた文脈である。オーラルヒストリーなるものは、歴史学においては刷新運動の道具であり、エリート研究においては新たな資料群と視点の転換をもたらす道具だった。オーラルヒストリーという名称は、歴史の書き換えと補償請求運動を強力に推進し、心理療法に新たな分野をもたらし、学際的教育やコミュニティとの連携を可能にした活動に対して用いられた。

文書資料と口述資料との違いがそれほど強調されなくなるにつれて、もはや敢えて「オーラル」であることを強調する必要のある歴史研究や社会活動は生まれなくなってくるかも知れない。その時には、かつて何に対して「オーラル」であることが重視されたのかという検討が一層重要になってくるだろう。

参考文献

蘭由岐子, 2008,「コメント」『フォーラム現代社会学』7：84-6.
Bermani, Cesare, 1997, *Il Nemico Interno: Guerra Civile e Lotte di Classe in Italia*, Roma: Odradek.
Blackburn, Kevin, 2008, "History From Above: The Use of Oral History in Shaping Collective Memory in Singapore," Paula Hamilton and Linda Shopes eds., *Oral History and Public Memory*, Philadelphia: Temple University Press, 31-46.
Bornat, Joanna, 2001, "Reminiscence and Oral History: Parallel Universe or Shared Endeavor?" *Aging and Society*, 21: 219-41.
Bornat, Joanna and Hanna Diamond, 2007, "Women's History and Oral History: developments and debates," *Women's History Review*, 16 (1): 19-39.
British Library, 2014, "Oral History", London: British Library, (retrieved August 31, 2014, http://sounds.bl.uk/oral-history).
Brown, James W., and Rita T. Kohn, 2007, *Long Journey Home: Oral Histories of Contemporary Delaware Indians*, Bloomington: Indiana University Press.
Bull, Edward ed., 1923, *Norsk Biografisk Leksikon*, Oslo: Aschehoug.
Butler, Robert N., 1963, "The Life Review: An Interpretation of Reminiscence," *The Aged Psychiatry*, 26: 65-76.
Cross, Nigel and Rhiannon Barker eds., 1991, *At the Desert's Edge: Oral Histories From the Sahel*, London: Panos/SOS Sahel: 1-16.
Douglass, Frederick, 1963, *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave*, Garden City NY: Doubleday.
江口怜, 2013,「教育史におけるオーラル・ヒストリー研究の動向と可能性」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』39: 137-43.
Fosl, Catherine and Tracy E. K' Meyer, 2010, *Freedom on the Border: An Oral History of the Civil Rights Movement in Kentucky*, Kentucky: University Press of Kentucky.
Frisch, Michael, 1993, "Editorial," *Journal of Oral History Society*, 21 (2): 2.
————, 2006, "Oral History and the Digital Revolution: Toward a Post-Documentary Sensibility," Robert Perks and Alistair Thompson eds., *The Oral History Reader,* Oxon: Routledge.
Gluck, Sherna, 1977, "What's So Special about Women?: Women's Oral History," *FRONTIERS: A Journal of Women Studies*, 2: 3-13.
Grele, Ronald, 1996, "Directions for Oral History in the United States," David K. Dunaway and Willa K. Baum eds., *Oral History: An Interdisciplinary Anthology* (*2nd edition*), Walnut Creek, CA: AltaMira Press, 62-84.
————, 2006, "Oral History as Evidence," Thomas E. Charlton, Lois E. Myers and Rebecca Sharpless eds., *Handbook of Oral History*, Lanham: AltaMira Press, 43-101.
Hamilton, Paula, "Sales of the Century?: Memory and historical consciousness in Australia," Katharine Hodgkin and Susannnah Radstone eds., *Memory, History, Nation: Contested Pasts*, New Brunswick: Transaction Publishers, 136-52.
Hearth, Amy Hill, 2008, *'Strong Medicine' Speaks: A Native American Elder Has Her Say: an Oral History,* New York: Atria/Simon & Schuster.（= 2012, 佐藤円・大野あずさ訳『アメリカ先住民女性の現代史――" ストロング・メディスン " 家族と部族を語る』彩流社.）
広川禎秀, 1994,「日本近現代史研究とオーラル・ヒストリー」『人文研究』64（11）：37-58.
Hong Kong Oral History Archives: Collective Memories, 訪談主題 Selected Themes of the Interviews, (Retrieved September 30, 2014, http://sunzi.lib.hku.hk/hkoh/browse_theme.jsp).
Hong, Lysa, 2000, "Ideology and Oral History Institute in Southeast Asia," Lim Pui Huen, James H. Morrison and Kwa Chong Guan eds., *Oral History in Southeast Asia: Theory and Method*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 33-43.
Hunke, Hajo, 1989, *Die andere Erinnerung:gesprache mit judischen Wissenschaftlen im Exil*, Frankfurt: Fischer-Taschenbuchverlag.
黄克武, 李郁青, 1999,『戒嚴時期臺北地區政治案件口述歷史』台北：中央研究院近代史研究所.
Jordan, Teresa, 1982, *Cowgirls: Women of the American Western Oral History*, NY: Doubleday.

Launis, Roger D., 1999, "NASA History and the Challenge of Keeping the Contemporary Past," *The Public Historian*, 21 (3): 68-81.

The Library of Congress, 2014, "About the Project," February 5, 2014, (Retrieved August 12, 2014, http://www.loc.gov/vets/about.html).

Lim How Seng, 2000, "Interviewing the Business and Political Elite in Singapore: Methods and Problems," Lim Pui Huen, James H. Morrison and Kwa Chong Guan eds., *Oral History in Southeast Asia: Theory and Method*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 55-65.

Lewis, Earl, 1995, "Connecting Memory, Self, and the Power of Place in African American Urban History," *Journal of Urban History,* 21 (3): 347-71.

林水泉口述 , 曾品滄, 許瑞浩訪問, 2004,『一九六〇年代的獨立運動――全國青年團結促進會事件訪談録』新店：國史館.

Lyndqvist, Sven, 1978, *Gräv där Du Star*, Hafstad: Bokförlaget Atlas.

Kennedy, Rosanne, 2001, "Stolen Generations Testimony: Trauma, Historiography, and the Question of 'Truth'," *Aboriginal History*, 25: 116-31.

Klempner, Mark, 2000, "Navigating Life Review Interviews with Survivors of Trauma," *Oral History Review*, 27 (2): 67-83.

Kilburn, Michael, 2014, "Introduction: The Third Meaning of Oral History," *Oral History Forum*, 34, Special Issue: Human Rights and Oral History: Stories of Survival, Healing, Redemption, and Accountability, (Retrieved August 30, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/view/544/622).

小林多寿子, 2009,「声を聴くこととオーラリティの社会学的可能性」『社会学評論』60（1）: 73-89.

Kohn, Lita, 1997, *Always a People: Oral Histories of Contemporary Woodland Indians*, Bloomington: Indiana University Press.

Kuhn, Cliff and Marjorie L. McLellan, 2006, "Voices of Experience: Oral History in Classroom," Barry A. Lanman and Laura M. Wendling eds., *Preparing the Next Generation of Oral Historians: An Anthology of Oral History Education*, Lanham: AltaMira Press, 35-54.

桝谷鋭, 2007,「アジアにおけるオーラルヒストリー――マレーシア、シンガポールを中心に」『日本オーラル・ヒストリー研究』3: 63-73.

御厨貴, 2002,『オーラル・ヒストリー――現代史のための口述記録』東京：中公新書.

――――, 2009,「近代思想の対比列伝――オーラル・ヒストリーから見る」『アステイオン』71: 180-213.

Morantz, Regina M., Cynthia S. Pomerleau and Carol H. Fenichel, 1982, *In Her Own Words: Oral Histories of Women Physicians*, Santa Barbara: Praegar.

中村伸子, 1989,「「社会史」のためのオーラル・ヒストリとその方法――特に語り手の主観の問題を中心に」『現代史研究』35: 51-67.

Nasstrom, Kathryn L., 2008, "Between Memory and History: Autobiographies of the Civil Rights Movement and the Writing of Civil Rights History," *Journal of Southern History*, 74 (2): 325-64.

Nevins, Allain, 1966, "Oral History: How and Why it Was Born," *Wilson Library Bulletin*, 40: 600-1.

Ng-A-Fook, Nicholas, Sharon Anne Cook and Marie Ainsworth, 2012, "Introduction: Making Educational Oral Histories in the 21st Century," *Oral History Forum* 32, Special Issue: Making Educational Oral Histories in the 21st Century, (Retrieved August 31, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/view/423/487).

Oppenheimer, Gerald M., 2007, *Shattered Dreams? An Oral History of the South African AIDS Epidemic*, Oxford:Oxford University Press.

Passerini, Luisa, 2009, *Fascism in Popular Memory: The Cultural Experience of the Turin Working Class*, Cambridge: Cambridge University Press.

von Plato, Alexander, 2012, "Twenty Years After: On the Development of Oral History in Central and Eastern Europe," *Oral History Forum* 32, (Retrieved December 17, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/view/435/499)

Perks, Robert, 2010, "The Roots of Oral History: Exploring Contrasting Attitude to Elite, Corporate and Business Oral History in Britain and the U.S." *Oral History Review*, 37 (2): 215-24.

Perks, Robert and Alistair Thompson, 2009, "Critical Developments: Introduction," Robert Perks and

Alistair Thomson eds., *The Oral History Reader*, Oxon: Routledge, 1-13.
Poniatowska, Elena, 1993, *Hasta No Verte Jesus Mio*, NY: French & European Pubns.
————, 1998, *La noche de Tlatelolco: Testimonios de historia oral*, LaFama: Ediciones Era.
Portelli, Alessandro, 1991, *The Death of Luigi Trastulli: The Form and Meaning of Oral History*, NY: SUNY Press.
————, 1996, "Oral History in Italy," David K. Dunaway and Willa K. Baum eds., *Oral History: An Interdisciplinary Anthology*, Walnut Creek: Altamira Press, 391-416.
————, 2004, *The Order Has Been Carried Out: History, Memory, and Meaning of a Nazi Massacre in Rome*, Hampshire: Palgrave McMillan.
Pozzi, Pablo, 2012, "Oral History in Latin America," *Oral History*, 32, (Retrieved August 30, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/viewFile/442/505).
Popular Memory Group, 1982, "Popular Memory: Theory, Politics, Method," Richard Johnson ed., *Making Histories*, London: Hutchinson, 205-52.
Ritchie, Donald, 1994, *Doing Oral History: A Practical Guide*, Oxford, Oxford University Press.
Republic of China, Cultural Devision, 2013, "News Release: MINISTRY LAUNCHES DATABASE TO PRESERVE TAIWAN'S ORAL HISTORY," November 18, 2013, (Retrieved August 30, 2014, http://english.moc.gov.tw/article/index.php?sn=1440).
Roosa, John, 2013, "Who Knows? Oral History Methods in the Study of the Massacres of 1965-66 in Indonesia," *Oral History Forum,* 33, Special Issue: Confronting Mass Atrocities, (Retrieved August 30, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/view/528)
Ryant, Carl, 1988, "Oral History and Business History," *The Journal of American History*, 560-6.
酒井順子, 2006,「イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開——個人的ナラティヴと主観性を中心に」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号：76-97.
桜井厚, 2008,「コメント 2：口述資料の重要性——「経験的語り」の歴史叙述」『日本オーラル・ヒストリー研究』4: 53-6.
Sangster, Joan, 2013, "Oral History and Working Class History: A Rewarding Alliance," Oral History Forum, 33（Retrieved August 30, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/viewFile/459/538）.
Schwarzstein, Dora, 1996, "Oral History in Latin America," David K. Dunaway and Willa K. Baum eds., *Oral History: an interdisciplinary anthology*, Walnut Creek: Altamira Press, 417-24.
Sharpless, Rebecca, 2006, "The History of Oral History," Charlton, Thomas L., Louis E. Myers and Rebecca Sharpless eds., 2006, *Handbook of Oral History*, Oxford: Oxford University Press, 19-42.
清水透, 2007,「フィールドワークと歴史学」『三田社会学』15: 31-42.
Starr, Louis, 1974, "Oral History," *Encyclopedia of Library and Information*, vol.20, New York: Marcel Dekker, 440-63.
臺灣省文獻委員會編, 1993,『臺灣婚喪習俗口述歴史輯録』南投：臺灣省文獻委員會.
Taylor, Timothy D., 2012, *The Sounds of Capitalism: Advertising, Music, and the Conquest of Culture*, Chicago: University of Chicago Press.
The Australian Army, 2012, "Oral History Team," Department of Defence, Commonwealth of Australia, (Retrieved August 12, 2014, http://www.army.gov.au/Our-history/Army-History-Unit/Our-business/Oral-History-Team).
Thompson, Alistair, 1990, "ANZAC Memories: Putting Popular Memory Theory into Practice in Australia," *Oral History*, 18 (2): 25-31.
————, 1998, "Fifty Years On: An International Perspective on Oral History," *The Journal of American History*, September 1998: 581-95
————, 2006, "Four Paradigm Transformations in Oral History," *The Oral History Review*, 34 (1): 49-70.
Thompson, Paul, 2000, *The Voice of the Past: Oral History*, London: Oxford University Press.（=2002, 酒井順子訳『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』東京：青木書店.）
University of Alaska Fairbanks, 2014, "Project Jukebox: Digital Branch of the University of Alaska Fairbanks Oral History Program," Fairbanks, AK: University of Alaska Fairbanks, (Retrieved December 13, 2014, http://jukebox.uaf.edu/site7/).

Vanêk, Miroslav, 2008, "The Development of Theory and Method in Czech Oral History after 1989," *Oral History Forum*, 28 (Retrieved August 30, 2014, http://www.oralhistoryforum.ca/index.php/ohf/article/viewFile/25/27).

Vanêk, Miroslav and Otáhal, Milan, 1999, *Sto studentských revolucí. Studenti v období pádu komunismu životopisná vyprávění*, Prag: NLN.

Wengraf, Tom,, Prue Chamberlayne and Johanna Bornat, 2002, "*A Biographical Turn in the Social Sciences?: a British-European view*," Cultural Studies ⇔ Critical Methodologies, 2 (2): 245-69.

Westerman, William, 1994, "Central American refugee testimonies and performed life history in the Sanctuary Movement," Rina Benmayer and Andor Skotones eds., *International Yearbook of Oral History and Life Stories, Vol.3: Migration and Identity*, Oxford: Oxford University Press, 167-81.

Yow, Valerie Raleigh, 1994, *Recording Oral History: A Practical Guide for Social Scientists*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications, Inc.

（ぱく　さら・日本学術振興会特別研究員）

Research Trend: Oral History

Sara PARK

Oral history is one of the major research methods in both humanities and social sciences such as anthropology, history, and sociology. The characteristics have been discussed, and methodology has been accumulated over decades.

This research note tries to grasp major research topic and research projects in oral history and tries to figure out what kind of research projects have been regarded as “oral history”. In contrast to the previous literatures on oral history, this note does not look at methodological discussion but at actual research projects and articles by region. After grasping overall conditions of oral history research past around 50 years, I analyze rough trends according to survey population and research intention.